

入江波光の修業時代 拾遺

東野治之

一 緒言

日本画家入江波光は、独特の重厚な画風で知られる一方、昭和十五年（一九四〇）から始まった法隆寺金堂壁画の模写事業において、第六号壁阿弥陀浄土図を担当する幸運に恵まれ、その中尊阿弥陀如来の模写に、迫真の妙技を見せた画家としても有名である。しかし、京都絵画専門学校の教員となつて、自らの画風を確立してゆく以前の活動は、ほとんど取り上げられることがなかった。本誌二十七集（二〇〇九年）に、「法隆寺壁画模写の巨匠 入江波光の修業時代」と題して掲げた拙文（以下、前稿という）は、その欠を幾分かでも補おうとしたものに他ならない。

前稿に対する反響として思いがけなかったのは、故画伯の孫に当たる荒木かおり氏から来翰があり、同氏の母、川面万里子氏の著書『自然』（六曜社、二〇一二年）を恵送されたことである。川面万里子氏は故画伯の娘であられ、画伯の弟子で六号壁の模写にも参加された、故川面稜一氏の夫人であり、この『自然』では、自ら詠まれた句を交えつつ、父入江波光の思い出を記されている。最初、荒木氏からは、たまたま拙文の存在を知られた由でお尋ねがあり、早速抜刷を拝呈するとともに、その後囑目した資料の写しを差し上げたことであつ

た。本稿では主としてその資料を紹介し、前稿を補つておくこととする。

二 新古版画展覧会の目録

入江波光が、画家として出発するに当たり、その画風に初期浮世絵など江戸時代絵画の影響を見せたこと、その背景には自ら傾倒した浮世絵収集があつたことは、前稿で述べたとおりである。その際、収集仲間として大槻さ、舟という人物があり、その交友関係を通じて、波光の名や挿画が大槻さ、舟の著作に見えることを明らかにした。

その後、新しい資料に出会う契機となつたのは、二〇〇九年、兵庫県西宮市にある辰馬考古資料館で開かれた秋季展「浪華文人蒐集家」である。この展示では、主に同館や学校法人甲陽学院、肥田皓三氏などの所蔵にかかる旧三宅吉之助コレクション⁽¹⁾が展示され、その実現には、当時、甲陽学院高等学校教諭であられた山内英正氏の尽力があつた。陳列品の中で私が注目したのは、展示パンフレットに左記のように記される二点の資料の一つである。

各種趣味の会 出品目録 （時代）大正、昭和 （所蔵）肥田皓三氏

その資料は、縦18 cm、横35.5 cmの活版一枚刷で、冒頭は次のようになって
いる（句読点は原文のまま）。

新古版画展覧会

日時 五月十四日午前十時より薄暮まで

場所 八坂神社境内 松本家に於て

木版趣味会の第三次会合として古代版画の展覧会を開く、良いもの斗りを
陳列して自慢する会でもありませんが、煙草でも呑んでゐる暇があったら
御覧ください。珠も瓦も一つ棚に列べてある処が値打です

六年五月中の二日

木版趣味会

西川純二
当番

大槻三八郎

これに続いて以下「出陳目録」となり、十六名の出品が二段組みで記載され
る。その名を順に列挙すると、入江波光、紅葉谷楠一、甲斐莊楠音、桂華庵、
相沢賢次、田中美風、郡山経堂、阿部中春、宮島春斎、那須刷仏、大槻さ、舟、
西川純二、寺松国太郎、黒田、西繁、藤沢文次郎の諸氏である。波光の出品が
最初にきており、二十五点と最も多く、これに次ぐのは大槻さ、舟の十七点で、
この会での二人の立場が推し量られる。

因みにこれらの人物に関しては、調査の手掛かりが見当たらないものも少な
くないが、ある程度履歴の判明する例や、著名人物も含まれる。たとえば紅葉
谷楠一は、京都市立絵画専門学校出身で、後述する甲斐莊楠音の一級下、田
中美風は、一九三五年に『田中美風遺詠集』が出版されている人物であろう。
一八七一年の生まれで、この前年に没している。宮島春斎は、落語好き連に属

した劇評家、寺松国太郎（一八七六―一九四三）は、倉敷市生まれの洋画家で
関西美術院を中心に活動した。また藤沢文次郎は、広重の木版絵葉書を出版し
たことが知られる。後年有名になった人物としては、甲斐莊楠音（一八九四―
一九七八）を挙げねばならない²⁾。甲斐莊楠音として知られるが、甲斐莊を名の
るのは一九三一年以後なので、ここに甲斐莊とあるのは誤りではない。波光よ
り年齢は若い、同じ京都市立絵画専門学校出身であり、その壮年期まで、国
画創作協会などともに活動した。異色の画風で有名である。波光、紅葉谷楠
一、甲斐莊楠音の三名は、ほぼ同世代の日本画家仲間であった。

三 波光の収集品から

いまさら言うまでもないが、この新古版画展覧会の目録によって、前稿で述
べたことが改めて裏付けられる。目録の年代は「六年」とあるばかりであるが、
前稿で指摘したとおり、大槻さ、舟は大正九年（一九二〇）に没しているから、
それに先立つ大正六年以外にはありえない。即ち前稿で取り上げた『風流祇園
桜』刊行の翌年に当たり、波光は三〇代前半であった。目録に挙げられた作品
は、彼がそれまでに入手していたものに相違なく、コレクションの一端をうか
がう意味で、以下にそれを掲げておこう。作品名、作者名と順序は目録のまま
である。

文七路考舞台姿（二枚続） 初代豊国
菊之丞伊三郎舞台姿 同
団蔵白猿舞台姿 同
八百蔵嵐三八舞台姿 同
忠臣蔵五段目六段目 同

雛形若菜の花模様	湖龍齋
女達と関取	春潮
俳優と女達	初代豊国
両国橋納涼(浮絵)	同
俳優舞台姿(小板)	春好
彦山権現誓助剣(三枚続)	春亭
俳優舞台姿(小板)	清経
当世風俗美人合	英山
当世美人合	英山
恵比須講	栄昌
夕立の景(二枚続)	国貞
炬燵の女	同
幸四郎団十郎半四郎立廻り姿(三枚続)	同
幸四郎三日月おせん	国直
役者(三枚続)	同
大井川(三枚続)	同
雪中の女(大板)長画	春扇
忠臣蔵五段目	房種
小女と若衆	栄深
征北	支那板画

磯田湖龍齋・勝川春潮・勝川春好・鳥居清経と中国版画などを除くと、作家は江戸時代後半から幕末明治の人々で、芝居絵の多さが目立つが、これがコレクションの全貌ともいえないであろう。むしろ波光は幅広く浮世絵版画を収集していたのではなからうか。ともあれ波光初期の画風の背景に、このようなコ

レクションがあつたことが具体的に知られるのは、興味深いと思う。

四 大槻さ、舟と三宅吉之助

本稿を草した目的は以上に尽きているといつてよいが、この機会に、関連して判明する事実と言及することを許されたい。一つは波光の盟友であつた大槻さ、舟のことである。前稿ではこの人物について、関係する出版物から、京都の清文堂印刷所で版画に関わる職を持ち、好色本や絵本、一枚刷の版画などの熱心なコレクターであつたという以外、詳細は不明とおいた。ところがその後、明治末年から活動した趣味の集まり、集古会の会員で、その情報が僅かながら会誌(はじめ『集古会誌』『集古会記事』、のち『集古』)に掲載されていることに気づいた^③。即ち『集古』辛酉四号(大正十年(一九二一)四月)の会報欄に、次のような会員死去の情報が載っている(原文に句読点を補った)。

会員大槻三八郎氏は、十一月十六日逝去、京都市外田中村干菜山光福寺に葬る。法号月晃笹舟居士。さ、舟は氏の雅号なり。享年四十七歳の由。令妹より報知あり、謹て哀悼の意を表す。

これによって大槻さ、舟の本名が三八郎であつたことや、前年十一月に没したこと、享年が明らかである。死亡を知らせた「令妹」は、『艶色京紅』^④の後書を「故さ、舟妹」として記した清水薫葉に相違ない。先の新古版画展覧会目録に当番の一人として見える大槻三八郎が、出品者のさ、舟であろうことは容易に推察がついたが、それはこれで確かに証明されるわけである。目録冒頭の言葉も、その口吻が『風流祇園桜』の跋(前稿所引)に通じるものがあり、大槻三八郎の筆であろう。なお、この会告に先立って、『集古』庚申一号(大正九

年（一九二〇）二月）所載の会員名簿に大槻三八郎が出ており、住所が京都市の「高倉通夷川上ル福屋町」とあるが、宮武外骨氏が主宰した雑誌『此花』第二枝（一九一三年）を見ると、カレンダーの話題に関連して、「京都市高倉通夷川北へ入る印刷所清文堂活版所」が、顧客に贈った浮世絵カレンダーを取り上げていて、その「清文堂主人大槻三八郎氏は浮世絵の好者であるような」とある。これらを総合すれば、大槻三八郎は自宅で印刷所経営を業としながら、浮世絵の収集と覆刻に打ち込んだ人物と考えられよう。『風流祇園桜』巻頭の例言末尾に、「京都清文堂印刷所参考部笹舟文庫 大槻さ、舟誌」とあるのは、単にそれを飾った表現に過ぎまいと思われる。社名の清文堂は、妹の姓が「清水」であることと、あるいは関係しているかもしれない。

付け加えておきたい第二の点は、三宅吉之助のことである。本稿で紹介した新古版画展覧会の目録には、その右下に三宅吉之助の所蔵を示す「宇津保文庫」の印が捺してあり、三宅吉之助が生前入手していたことが推察される。実は三宅吉之助も、同じころ集古会の会員であった。『集古』庚申三号（大正九年六月）の会告に、且水木村助次郎の紹介で入会したことが見えている。木村且水は、大阪の有名な古書肆だるまの主人である。

入江波光の青年時代が、このような収集と多彩な直接間接の人脈に彩られていたことは、後年の謹厳で禁欲的な波光の言動からは想像も及ばない。波光の埋もれた側面を垣間見せてくれる点で、片々たる新古版画展覧会の目録も貴重な意義を有するといえよう。

注

- (1) 三宅吉之助（一八八四～一九四三）は大阪の海産物商。古典籍や版画、拓本、考古遺物、古貨幣、人形、玩具、番付等の収集家で、住地の鞆に因み自宅を「宇津保文庫」と称した。甲陽学院校史資料室（室長山内英正）編『甲陽学院所蔵 旧「宇津保文庫」考古資料目録』

「瓦編（学校法人辰馬育英会、一九九八年）参照。なお本稿の第四節に若干の知見を追加している。

- (2) 京都国立近代美術館他編『大正日本画の異才―いきづく情念 甲斐庄楠音展』日本経済新聞社、一九九七年。

- (3) 集古会については、山口昌男『内田魯庵山脈』（晶文社、二〇〇一年）に詳しい。会誌には覆刻版（思文閣出版、一九八〇年）がある。

- (4) 同書は大正十年に刊行された大槻さ、舟の遺著。前稿参照。